

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370235

研究課題名(和文) 古代日本文学における河川交流の研究 日本海と瀬戸内海を繋ぐもの

研究課題名(英文) A study of transportation on the water using a river in Japanese literature-Connected the Sea of Japan to the Inland Sea-

研究代表者

堂野前 彰子(岡本彰子)(Donomae, Akiko)

明治大学・経営学部・その他

研究者番号：50588770

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、経済用語として捉えられてきた「交易」という行為を、単なるモノの交換ではなく人と人との関係を築くものとして捉えることによって、古代日本文学を新しく解釈することを目指した。その際注目したのは、日本海や瀬戸内海のみならず、日本海と瀬戸内海(太平洋)を繋ぐ河川ルート、即ち西から加古川水系、由良川水系、淀川水系、天竜川水系、姫川水系の三つの水系であり、記紀風土記の伝承や万葉集の旅の歌の中に、それら水系を利用した人々の移動や交易がなされるさまを見出した。それによって、それぞれの水系には、歴史的な意味や文学的なイメージが託されていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I try to interpret an old Japanese literature through the word "trade" which has been recognized not as an economic term but a mythological term. Therefore I pay attention to three river systems which connected the Sea of Japan to the Inland Sea. They are Kako-gawa river system-Yura-gawa river system, Yodo-gawa river system, Tenryu-gawa river system-Hime-kawa river system. The reason why I choose the above systems is that I found "trade" in "Kojiki", "Nihon-shoki", "Fudoki" and "Manyoshu". Then it is clear that each river system has a literary image with a historical meaning.

研究分野：日本古代文学

キーワード：河川交流 交易 古代日本文学 瀬戸内海 日本海 琵琶湖水系 神道集 三国遺事

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「交換・交易」という言葉は経済用語としてのイメージが強く、歴史学や文化人類学の分野ではすでに注目されているにも関わらず、古代日本文学においてはあまり注目されてこなかった。しかし、そもそも記紀神話冒頭では、モノザネの「交換」によって神々が誕生しており、「交易」を人と人との関係を築くものだと捉えれば、記紀神話や風土記、万葉集の中に「交換」や「交易」がなされる場面を見出すことは容易である。そのような視点を導入することで、今までにない新しい神話の解釈ができると考えた。

(2) 海に囲まれた日本では、モノの流通や人の移動には船が用いられることが多く、日本海や瀬戸内海航路が、その流通・移動の際の主な経路であった。それら海路についての研究はすでに行われていて、研究代表者もすでに研究を進めていたのだが、それら二つの海路を結ぶ河川・水系についての研究は、古代日本文学の分野では行われていないというのが現状であった。

(3) 歴史学や考古学では、互いにその成果を取り入れた共同研究が盛んであるが、日本文学との共同研究はあまり行われていない。歴史学や考古学、さらには民俗学や文化人類学の成果や理論を援用して取り組む本研究は、学際的な研究となり、反対にそれら研究分野にも影響を与えようと考えた。

## 2. 研究の目的

経済用語として捉えられてきた「交換・交易」という行為を、単なるモノの交換ではなく人と人との関係を表現するものとして捉え、神話世界を支える根本的な概念であると考えることにより古代日本文学を新しく解釈し、古代日本文学における「交易世界」を明らかにすることを目的とした。

(1) 既に日本海沿岸地域の交易の様相解明に着手している為、本研究では日本海と瀬戸内海(太平洋)を繋ぐ河川ルートに注目して「交易世界」の解明を試みた。

(2) また、民俗学、文化人類学、考古学、歴史学などの手法・研究成果を取り入れて複合的・総合的に行う本研究は、テキスト研究とフィールド調査のインテグレートでもあり、神話・伝承自身が交易の対象であることに注目して、従来の研究では明らかにならなかった交易の担い手についての考察も目指した。

(3) その際、中世日本文学のテキストである『神道集』や、韓国仏教説話集『三国遺事』も研究対象とし、『神道集』からは東国の古代交通路の様相を、『三国遺事』から海外交流の様相を明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

本研究を進めるにあたり、若狭・敦賀から琵琶湖を經由し、宇治川、木津川を経て大和へと到るルート、丹後半島から由良川・

円山川を經由し、加古川を経て瀬戸内海へと到るルート、越国から糸魚川を經由して、木曾川へと連なり伊勢湾へと到るルートの3つのサブテーマを設定し、それぞれ25年度~27年度までの3年間で研究を行った。具体的な研究方法は、Aテキスト研究とBフィールド調査である。

(1) Aテキスト研究で対象としたテキストは、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』『日本霊異記』であり、その研究を多方面から行うにあたり、文化人類学の理論・方法を取り入れたa)文学的な解釈を中心に、b)歴史的な観点からのテキスト解釈と、河川交流の中継地点・交易拠点の調査といったc)考古学の成果を加え、それら3つのアプローチを統合し総合的に研究を進めた。

(2) Bフィールド調査を行うにあたり用いるのは、民俗学的手法である。現地調査や現地でしか入手できない資料や民間伝承の収集によって、当該地域の地理的環境や風土を検証した。さらに神話・伝承自身を交易の対象として捉え、その類似・差異から交易ルートを解明し、交易の担い手についての考察を行った。

(3) また、渡来人(主に秦氏)の動向にも注目し、初期仏教のあり方やその伝播ルートに関しての調査研究も行った。その際研究対象としたのは、上記(1)で示した古代日本文学のほか、『神道集』や『三国遺事』である。

## 4. 研究成果

### (1) 平成25年度

平成25年度は「琵琶湖—宇治川—木津川水系」を中心とした南北にわたる河川交易と、紀伊半島を横断する「紀ノ川—吉野川—櫛田川」という東西河川交易の様相解明を目指した。そのアプローチ方法として、Aテキスト研究とBフィールド調査を行った。

Aテキスト研究では、古代文学である『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』に加え、中世文学である『倭姫命世記』および『神道集』の研究を行った。中でも特に『倭姫命世記』を丹念に読み込んだことから、倭姫巡行には記紀に描かれていたような神話的意味ばかりでなく、隠された意味があることがわかった。すなわち、その巡行地でその土地の神や豪族から帰順の印として御田を献上されていたことを根拠に、倭姫巡行には経済的意味があるのではないかと想定した。そこでBフィールド調査でも倭姫巡行の地を巡り、それら巡行の地が祭祀場であると同時に、水上交通の要衝であることを確認した。その結果、倭姫巡行の物語は、伊勢神宮設立を支える経済活動であったことが明らかとなった。

また、Aテキスト研究で改めて記紀の三輪山伝承と『山城国風土記』逸文の賀茂伝承の研究を行い、その背後には、かつて難波潟で繋がっていた「大和川—淀川—鴨川および木

津川水系」があることがわかった。そのような水系の存在を視野に入れれば、今までその関係が不明確であった三輪山伝承と賀茂伝承は無理なく接続する。神話の型としての類似ばかりでなく、実際の人々の動きとしての繋がりは確認でき、そのような移動の背景に、疑似的血縁関係を結んで同族と称しはじめた人々の経済活動があることにも気がついた。そのような琵琶湖水系や大和から和歌山にまで至る、紀ノ川水系は、『万葉集』の羈旅歌でもよく歌われており、古代人の実生活の中でもそれら水系を利用した人々の移動を確認することができた。

## (2) 平成 26 年度

平成 26 年度は「由良川—加古川水系」を利用した日本海と瀬戸内海を繋ぐ河川交易を明らかにすべく、丹後、若狭、越にかけての日本海交易の様相解明を目指した。そのアプローチ方法として、A テキスト研究と B フィールド調査を行った。

A テキスト研究では、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』に描かれた越に注目し、韓半島から渡来したアメノヒボコが出石を本拠地とするまでの軌跡を追った。西は「由良川—加古川」水系から、東は「敦賀—近江」を結ぶラインまでというその移動範囲は、畿内を包括したその一つ外側の地域にあたり、朝廷直轄地であるミケツ国に囲まれている。そのミケツ国からは塩が貢納されていて、結界をつくる塩によってその範囲が示されているのは「王の力」を考える上で極めて象徴的である。呪いをかける呪具として語られている一方、塩と言えば、サラリーの語源がソルトであったように、貨幣的価値を持つものにして流通していくものである。まさに王とはそれを独占し流通させていくものであることが明らかになった。

また、越が蝦夷征伐の拠点であることに注目し、蝦夷・悪路王・坂上田村麻呂伝承の研究も行った。古代における蝦夷は交易相手であったことが『日本書紀』の記述などからうかがえるのだが、そのような友好的な関係が壊されたのは仏像に鍍金するための黄金が必要になったからである。古代文献のみならず、寺社縁起や口承伝承、『神道集』の諏訪大明神秋山祭及び五月会事や『遠野物語』にも蝦夷伝承を探り、どのようにして蝦夷征伐がなされたのか多角的にアプローチした。その際、B フィールド調査として田村麻呂伝承を追って北上川をその水源まで遡り、田村麻呂によって奉納された千手観音や十一面観音の背後には黄金伝承があることを確認した。その結果、東北に散見される長谷寺は布教の名のもとにそのような交易ネットワークを拡大していったことが明らかとなった。

## (3) 平成 27 年度

平成 27 年度は「越国—系魚川—木曾川—伊勢湾ルート」及び「諏訪湖—天竜川—太平洋

ルート」を明らかにすべく、系魚川及び天竜川、諏訪の風土の検証を行った。諏訪に関しては古代日本文学に描かれることが少ないため、中世の書物ではあるけれど『神道集』の諏訪関連伝承から、東海道や東山道のあり方を探ることにし、文献研究は「諏訪縁起」の注釈作業を中心にすすめた。

諏訪関連伝承に語られる地名を追ってみると、その多くは歌枕や古代からの聖地と重なり、古代において明かではなかった古代道の解明に役立つことがわかった。例えば、ヤマトタケルの東征において、『日本書紀』では伊勢の次に駿河に向かっていて尾張に寄ったという記述がなく、尾張がかつて東海道ではなく東山道に属していたことを推測させるのだが、東山道を利用して陸奥の悪事の高丸退治に向かった田村麻呂に、諏訪明神に加えて熱田明神が加勢していることは、それを裏付けている。あるいは、田村麻呂が伊那で諏訪明神に出会うのは、伊那が信州への入り口にあたるからのみならず、その地が東海道とも天竜川を介して繋がる交通の要衝であったからであった。そのような諏訪の風土が A テキスト研究における注釈作業と、B フィールド調査から明かとなった。尚、その注釈は、研究成果として冊子にまとめ、関連研究機関などに配布した。

また、サブテーマ『三国遺事』の研究に関しても、韓国で開かれた国際学会において、記紀神話との比較から発表を行った。日韓のテキストを読み比べてみると、環東シナ海ともいべき広域の文化圏があることがわかり、記紀に語られる「カラクニ」にはそのような世界観が語られていることを指摘した。国際学会での発表により、韓国の説話研究者との国際交流を深めることができたことも大きな成果であった。

三年間の研究成果は、科研費学術図書の助成金を受け、平成 28 年度に出版することになったことを付け加えて記す。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

堂野前 彰子、「『遠野物語』に描かれた山の世界」、明治大学リバティアカデミーブックレット 32『遠野物語』を読む 3、pp23-55、2016 年 3 月、査読有

袴田 光康、「『朝鮮王朝実録』成宗条の琉球漂流に関する考察 金非衣らが訪れた八重山列島の島名と送還の使者について」、『淵民學志』第 24 輯(韓国)、2016 年 3 月、pp9-42 査読有

堂野前 彰子、「日向神話の「韓国」 『三国遺事』に描かれた「倭」と比較して」、『溯上古典研究』第 47 輯、(韓国)、pp47-74、2015 年 10 月、査読有

金 任仲、「百済王善光と長野善光寺」、『淵民学志』24 輯(韓国)、2015 年 8 月、pp207~229、査読有

堂野前 彰子、「『遠野物語』と蝦夷」、『明治大学リバティアカデミーブックレット』「『遠野物語』を読む 2」、pp25-54、2015 年 3 月、査読有

堂野前 彰子、「古代日本文学に描かれた若狭 琵琶湖水系と交易」、『美浜町歴史シンポジウム記録集 8』若狭の塩、再考』、pp57-79、2015 年 3 月

袴田光康、「『入唐求法巡礼行記』に描かれた在唐新羅人」、『涑上古典研究』第 43 集(韓国)、2015 年 2 月、pp85~113、査読有

堂野前 彰子、「龍と王権 『三国遺事』の説話から」、『涑上古典研究』第 42 輯(韓国)、pp419-pp442、2014 年 12 月、査読有

金 任仲、「明恵における光明真言土砂加持の信仰」、『Journal of East Asian Studies』第 5 号(韓国)、2014 年 12 月、pp145~172、査読有

袴田 光康、「六条院の春 「胡蝶」巻の蓬萊と浄土」、『国語と国文学』第 91 巻第 11 号、2014 年 11 月、pp64~76、査読有

金 任仲、「元暁大師と明恵上人 高山寺関連資料を中心に」、『淵民学志』第 22 輯(韓国)、2014 年 8 月、pp87~132、査読有

堂野前 彰子、「昔語りから「物語」へ 柳田国男が描いた『遠野物語』の世界」、『明治大学リバティアカデミーブックレット』「『遠野物語』を読む」、pp20-pp36、2014 年 3 月、査読有

堂野前 彰子、「『常陸国風土記』に描かれた倭武天皇」、『茨城県史研究』98 号、茨城県立博物館、pp1 15、2014 年 3 月、査読無

堂野前 彰子、「播磨への道 オケ・ヲケ皇子の逃避行」、『文化継承学論集』第 10 号、明治大学大学院文学研究科、2014 年 3 月、pp27-38、査読有

堂野前 彰子、「黄金神話と王権 琉球説話集『遺老説伝』と『三国遺事』の比較から」、『淵民学誌』第 20 輯、韓国延世大学、pp215 238、2013 年 8 月、査読有

金 任仲、「徐福渡来伝説 済州島を中心に」、『東アジア文化研究所紀要』4 号(韓国)、pp 47~61、2013 年 7 月、査読有

〔学会発表〕(計 15 件)

金 任仲、「日本華嚴宗の祖師元暁大師」、『2015 年 10 月 31 日、元暁寺(韓国光州)』

金 任仲、「百済王善光と長野善光寺」、『第 6 回明治大学・高麗大学学術大会、2015 年 10 月 24 日、明治大学(東京都千代田区)』

堂野前 彰子、「恋に生きた女たち 「一夜孕み」譚の行方」、『鯖江市・明治大学連携事業・ふるさと歴史講座、2015 年 10 月 4 日、鯖江市まなべの館(福井県鯖江市)』

堂野前 彰子、「『三国遺事』に描かれた「倭」 日向神話の「韓国」と比較して」、『

第 73 次琉球(沖縄)と朝鮮(韓国)の文化交流 600 年学術大会(主催:涑上古典研究会、後援:韓国研究財団(社)忠肅公李芸先生紀念事業会)、2015 年 8 月 7 日、韓国国立外交院(韓国ソウル)

袴田 光康、第 73 次琉球(沖縄)と朝鮮(韓国)の文化交流 600 年学術大会(主催:涑上古典研究会、後援:韓国研究財団(社)忠肅公李芸先生紀念事業会)、2015 年 8 月 7 日、韓国国立外交院(韓国ソウル)

袴田 光康、「天神信仰と帝釈天信仰 須磨流離の背景」、『物語研究会シンポジウム「仏教的 な思想・文化と物語」』、2015 年 3 月 21 日、日本大学文理学部(東京都世田谷区)

堂野前 彰子、「龍と王権 『三国遺事』の説話から」、『山東大学韓国学院威海校創立三十周年記念国際学術大会、2014 年 10 月 18 日、山東大学韓国学院威海校(中国威海)』

袴田 光康、「円仁と在唐新羅人の社会 山東省赤山浦を中心に」、『山東大学韓国学院威海校創立三十周年記念国際学術大会、2014 年 10 月 18 日、山東大学韓国学院威海校(中国威海)』

堂野前 彰子、「日向神話と玉 その神話における機能について」、『明治大学・宮崎県連携講座記紀編さん 1300 年記念講座神話の源流「みやざき」』、2014 年 10 月 11 日、明治大学(東京都千代田区)

堂野前 彰子、「古代日本文学に描かれた若狭 琵琶湖水系と交易」、『平成二十六年度美浜町歴史フォーラム「若狭の塩、再考」』、2014 年 10 月 4 日、美浜町生涯学習センターなびあす(福井県美浜町)

金 任仲、「東アジアの文化交流 徐福の日本渡来伝承について」、『2014 年 7 月 17 日、山東大学韓国学院威海校(中国威海)』

堂野前 彰子、「『常陸国風土記』の倭武天皇」、『常陽史料館特別展示「『常陸国風土記』の世界」展に伴う講演会、主催:常陽藝文センター 展示後援:茨城県・茨城県教育委員会・水戸市教育委員会、2013 年 4 月 13 日、常陽藝文センター(茨城県水戸市)』

堂野前 彰子、「古代文学と東海の道」、『二国間共同セミナー、2013 年 12 月 21 日、静岡大学(静岡県静岡市)』

堂野前 彰子、「古代日本文学における鬼と笛」、『韓国日本語文化学会、2013 年 11 月 9 日、韓国外語大(韓国ソウル)』

金 任仲、「東アジアの文化交流 法蔵の書簡をめぐる」、『2013 年 4 月 12 日、中国烟台大学外国語学院(中国烟台)』

〔図書〕(計 10 件)

金 任仲、「明恵における光明真言土砂加持の信仰」、『絵解きと伝承そして文学』(林雅彦教授古稀・退職記念論文集) 方丈堂出版、2016 年 1 月、pp309~338

袴田 光康、「東ユーラシアにおける庭園

と蓬萊—王朝庭園文学論序説—』、『王朝文学と東ユーラシア文化』(小山利彦・河添房江・陣野英則編) 武蔵野書院、2015年10月、pp161~181

袴田 光康、「六条院と蓬萊—庭園と漢詩をめぐって—」(田坂憲二・久下裕利編『源氏物語の方法を考える』) pp189~218、武蔵野書院、2015年5月、査読無

袴田 光康、「物語の素材とモデル—「高麗人」と「鴻臚館」について—」、『新時代の源氏学1『源氏物語の生成と再構築』(助川幸逸郎・立石和弘・土方洋一・松岡智之編集) 竹林舎、2014年5月、pp164~189

金任仲、『華嚴縁起研究—元暁と義湘の行跡』、宝庫社、2015年2月、総ページ数337

堂野前 彰子『日本神話の男と女』三弥井書店、2014年7月、総ページ数316

堂野前 彰子、「『三国遺事』と日本神話—日光感精神話の行方—」、『『三国遺事』の新たな地平(袴田光康・許敬震編、) 勉誠出版、2013年11月25日、pp50-59

金 任仲、「義湘大師と明恵上人—『三国遺事』と『華嚴縁起』を中心に—」、『『三国遺事』の新たな地平(袴田光康・許敬震編、) 勉誠出版、2013年11月25日、pp102~116頁

袴田 光康、「『三国遺事』研究の始発と現在—檀君神話をめぐって—」、『『三国遺事』の新たな地平(袴田光康・許敬震編、) 勉誠出版、2013年11月25日、pp4~19、

袴田 光康、「『三国遺事』における神仏習合—帝釈信仰と護国思想—」、『『三国遺事』の新たな地平(袴田光康・許敬震編、) 勉誠出版、2013年11月25日、pp189~202

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堂野前 彰子 (DONOMAE Akiko)

明治大学経営学部兼任講師

研究者番号：50588770

(2) 研究分担者

金 任仲 (KIM Im-Jung )

明治大学文学部兼任講師

研究者番号：30599577

袴田 光康 (HAKAMADA Mitsuyasu)

静岡大学人文社会科学部教授

研究者番号：90552729

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：